

第3回沖縄振興審議会総合部会専門委員会
議事録

内閣府政策統括官（沖縄政策担当）付
企画担当参事官室

第3回沖縄振興審議会総合部会専門委員会 議事次第

日時：平成21年11月10日（火）10：00～12：00

13：00～15：00

場所：那覇第2地方合同庁舎2号館2階「共用会議室D・E」

1 開 会

2 議 事

テーマ「環境、県民生活、文化、科学技術、人材育成、国際交流について」

・基調発言 田中 律子 沖縄振興審議会委員

・自由討議

（12：00～13：00 休憩）

・基調発言 北野 宏明 沖縄振興審議会総合部会専門委員

・自由討議

3 閉 会

沖縄振興審議会総合部会専門委員会配布資料

資料1 座席表

資料2 沖縄振興審議会総合部会専門委員会委員名簿

資料3 専門委員会の今後のスケジュールについて

資料4 「環境、県民生活、文化、科学技術、人材育成、国際交流について」
説明資料

資料5 「環境、県民生活、文化、科学技術、人材育成、国際交流について」
参考資料

資料6-1 「沖縄21世紀ビジョン（仮称）」（素案）の構成

資料6-2 「沖縄21世紀ビジョン（仮称）」（素案）

—沖繩振興審議会総合部会委員名簿—

琉球大学名誉教授	嘉 数 啓
関西学院大学教授	小 西 砂千夫
株式会社春夏秋冬代表取締役	玉 沖 仁 美
沖縄電力株式会社代表取締役会長	當 眞 嗣 吉
琉球大学准教授	藤 田 陽 子
東京電機大学教授	安 田 浩

—沖繩振興審議会専門委員名簿—

琉球大学教授	池 田 考 之
沖縄県医師会理事	稲 田 隆 司
八重山漁業協同組合組合長	上 原 亀 一
PwCアドバイザリー株式会社パートナー	大 澤 真
生活協同組合コープおきなわ副理事長	大 城 京 子
株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所所長	北 野 宏 明
財団法人都市経済研究所理事	上 妻 毅
株式会社ワーク・ライフバランス代表取締役	小 室 淑 恵
株式会社MM総研所長	中 島 洋
琉球大学教授	仲 地 宗 俊
株式会社かりゆしエンターテイメント社長	長 嶺 栄 子
株式会社仲本工業社長	仲 本 豊
沖縄国際大学教授	野 崎 四 郎
TAO Factory 代表理事	平 田 大 一
名桜大学教授	宮 平 栄 治

— 出席者 —

○審議会委員

田中律子委員

○総合部会委員

嘉数啓委員、玉沖仁美委員、藤田陽子委員、安田浩委員

○専門委員会委員

池田孝之委員、稲田隆司委員、大澤真委員、上原亀一委員、北野宏明委員、上妻毅委員、
中島洋委員、長嶺栄子委員、仲本豊委員、平田大一委員

○内閣府

槌谷官房審議官、小池参事官（企画担当）、中村事業振興室長、黒羽沖縄総合事務局次長

○環境省

奥田那覇自然環境事務所長

○沖縄県

平良企画調整統括監

第3回沖縄振興審議会総合部会専門委員会

日時 平成21年11月10日（火）

10：00～12：00

13：00～15：00

場所 那覇第2地方合同庁舎2号館2階共用会議室D・E

【午前の部】

1 開 会

○嘉数座長 定刻になりましたので、これより第3回沖縄振興審議会専門委員会を開催いたします。

皆様にはお忙しい中をお集まりいただき、誠にありがとうございます。

本日は3名の総合部会の委員が所用により、ご欠席であります。専門委員で大城委員、小室委員、仲地委員、野崎委員、宮平委員を除く10名の専門委員が今日ご出席なさっております。

稲田委員と北野委員は午後から出席の予定でございます。

本日は午前中、「環境、県民生活、文化」を議論いたしまして、午後から「科学技術、人材育成、国際交流」についてご議論いただきたいと思っております。

大変多岐にわたるテーマですが、社会資本の整備が一定程度進んでおりますので、これとの関連で、本日は非常に重要な分野での議論をお願いしたいというふうに考えております。

本日は沖縄振興審議会の田中律子委員にもご出席いただき、午前中に沖縄県内でのサンゴ礁再生活動に携わっているご経験を踏まえて、「沖縄における環境問題について」基調発言をしていただくことになっております。

また、午後には北野委員から「沖縄科学技術大学院大学による科学技術の振興等について」基調発言をいただくことになっております。

なお、審議については審議会同様、原則公開することにしておりますので、ご了承お願いいたします。

それでは、「環境、県民生活、文化、科学技術、人材育成、国際交流について」事務局の配付資料のご説明をお願いしたいと思っております。

小池参事官と中村室長、よろしく願いいたします。

2 議 事

テーマ「環境、県民生活、文化、科学技術、人材育成、国際交流について」

○小池参事官 それでは、お手元の資料4をご覧くださいと思います。資料4につきまして、まずご説明を申し上げます。

まず、1ページをご覧くださいと思いますが、沖縄振興計画の柱立てについてまとめておりますが、本日のテーマは左側にあります計画の8つの柱のうち、3番目の「科学技術の振興と国際交流・協力の推進」から、下から3つ目になりますが、多様な人材の育成と文化の振興までを取り上げるものでございます。

右側でございますように、本土復帰以来、平成13年までの沖縄振興開発計画では、本土との格差是正に主眼が置かれ、現行の計画では民間主導の自立型経済の構築に主眼がおかれていますが、本日取り上げるテーマは、今後重要になってくる分野と考えているところでございます。

このようにテーマが非常に幅広いこともございまして、この資料につきましては、主に内閣府が関与している事業等を中心に構成しておりますが、実際には県、市町村の事業も含めまして、多くの事業が行われております。この資料はかなり限定的な範囲での資料となっております点についてご留意いただきたいと思います。

まず、2ページでございますが、環境の関連でございます。循環型社会の構築に向けた取り組みということで、代表的な取り組みを2つ挙げておりますが、①としまして、波照間島における可倒式風車の例でございます。

②としまして、現在、平成20年度から関係府省の連携により実証実験を実施中の宮古島バイオエタノール・アイランド構想についてでございます。サトウキビからバイオエタノールを製造しまして、最終的に島内で消費されるガソリンの代替をするということを目指した事業でございます。

○中村室長 私、事業振興室長の中村と申しますけれども、本日、相当担当分野があるということで、そういったものについてご説明をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

環境の1つの各論として、循環型社会構築のための1つの重要な取り組みであります廃棄物処理対策について3ページのところでご説明をいたします。

内閣府におきましても、循環型社会形成推進交付金というものを確保いたしまして、これを環境省のほうで実際には執行のほうをやっていただきますけれども、これによって沖

縄全域におきまして、Ⅲの地図にありますように、いろんな必要な施設の整備を行ってきております。その結果、焼却処理率という表のデータをご覧くださいますと、振興計画を始めてからかなり順調に数字が伸びておりまして、もう全国に遜色がない率になっておりますが、他方、リサイクル率という最近重要視されている指標をご覧くださいますと、まだまだレベルがやや低いと。これは1つには、Ⅳの今後の課題のところにもありますように、特に離島地域におきまして、どうしてもコストがかさむということもあって、ここはやや構造的な弱点というところもありますが、今後こういった取り組みをどうしていくかといったあたりも課題になってくると考えております。

○小池参事官　引き続きまして、4ページでございますが、自然環境の保全・活用に向けた主な取り組みについてでございます。生態系の保全につきましては、絶滅が危惧されるヤンバルクイナなどの希少種を保護するため、環境省と沖縄県が協力して取り組んでおります。

また、サンゴ礁の保全でございますが、サンゴ礁につきましては、2行目にもございますが、本土復帰前と比較しまして、白化現象等により大幅に減少されているということでございまして、これも環境省・沖縄県、また民間の方々の力で様々な取り組みが行われております。後ほど田中委員からも関連の話があることと存じます。

3つ目のエコツーリズムの関係ですが、昨年度、成立しましたこの法律を踏まえまして、慶良間地域において協議会も設置されまして、来年4月から一定のダイバーの立入制限が行われる予定でございます。

5ページでございますが、琉球諸島の世界自然遺産登録に向けた取り組みを掲げております。

平成15年には琉球諸島は、候補地として選定されておりまして、現在登録を目指した取り組みが行われております。

また、やんばる地域の国立公園指定に向けた取り組みなども行われております。

内閣府の事業に関連いたしますが、下の欄ですが、公共工事の施工等に伴う赤土等の流出防止対策がございます。

右側のグラフの下に52万トンから30万トンとございますが、全体の流出量は減少しておりますけれども、引き続き、県の流出対策基本計画等に基づきまして、各種の対策を計画的に推進していく必要があるところでございます。

6ページでございます。

漂流・漂着ごみの問題についてでございますが、これにつきましては、最近新たな立法措置が行われまして、それに基づく取り組みも行われつつございます。重点海岸のクリーンアップ等のほか、各都道府県に基金を設けまして、海岸漂着物に関する事業を行うということをごさしまして、現在始まっているところでございます。

真ん中の参考欄ですが、CO₂排出量に関するデータでございます。全国のデータは環境省のデータ、沖縄のデータは沖縄県のデータでございます。いずれも基準年から若干増加をしているという現状です。

7ページをお願いいたします。

県民生活の分野についてでございますが、なかなかデータのとりえ方が難しいわけですが、上段には関連する統計データの主なものを掲げておりますが、合計特殊出生率につきましては全国1位。また、平均寿命につきましては、女性が全国1位。男性は全国26位と順位が下がっております。

婚姻率については全国2位。離婚率は全国1位ということでございます。また、物価は平均的には全国水準よりはやや低くなっておりまして、また、生活費については、社会生活基本調査というところから、どのようなことに時間を多く使っているか等について調査した結果がございますので、そこに参考までに掲げております。

また、下のほうに琉球新報社が5年ごとに行っている県民意識調査の結果の一部を記載しております。全体として大きな変化があるとは思えないと思いますが、上から3番目、4番目あたりでございますが、近所づきあいについて「以前よりやや薄れてきた」というふうなことが言われております。また、他方、下から2番目の先祖崇拜などについては、なお、伝統を重んじる傾向が強いというふうな分析ができるかと思えます。

○中村室長 それでは、県民生活の分野で、具体的に内閣府でも取り組みを進めております分野の1つといたしまして、保健医療体制の充実というところ、8ページでございます。

医療提供体制といたしまして、沖縄県の場合は多くの有人離島を抱えるということで、県立の医療機関をⅢの地図にもございますように、様々なところに整備をして配置しているというのが大きな特徴かと思えます。これに対しまして、内閣府におきましても、特に医師が不足しているところのための補助金による支援をやっておりますが、どちらかというと、県自身のご努力もありまして、Ⅱ番目、医師確保の推移・状況というところをご覧くださいますと、10万人当たりの医師数でみていきますと、何十年間の間に非常に確保

が進みまして、人口当たり全国を上回るような状況が生まれております。

ただ、今後1つの課題といたしまして、これをよく見ますと、一番下の表にありますように、本島の南部に非常に医師が集中をしております、そのほかの部分には全国よりも劣ったレベルにあるということで、こういった県内でのバランスというのは1つの課題になってこようかと思えます。

続きまして、9ページであります、医師の確保に加えまして、内閣府におきましては、医療施設、県立病院を中心とする医療施設の整備についても補助金の形で支援を行っておりますが、これを用いまして県のほうにおかれましては、最近、建物等も古くなってきているとか、中核病院としての新たな役割が求められるということで、再整備を進められておりました、こういった病院事業経営の健全化も図りながら医療が提供できる体制を整備していくということが、今後とも必要になってくると考えております。

10ページをお願いいたします。

保育関係でございますけれども、保育施策については全国的な問題として、保育所の整備などを少子化対策ということで進められておりますが、特に沖縄県は実は大都市部ではないにもかかわらず、非常に待機児童数や認可外保育施設の利用児童数が多いということで、非常に大きな特徴になっております。データ的には現状のところを書いてあるとおりで、いわゆる待機率というデータで見ますと、全国1位という状況になっております。

県内の各自治体では、保育所整備というのは、それなりには進めてきた経緯があるのですけれども、これによりまして認可外保育施設の利用児童数というのは、IIの表の真ん中あたりをご覧くださいますと、だんだん減ってきて、こういう人たちは随時、認可保育所に移動をしているような、マクロ的にはそういうことになるんだろうと思えますが、一方で、これも全国的な傾向として認可保育所の整備を進めても、待機児童数は減らないという状況はありまして、こういったあたりは今後とも取り組みが求められているのだろうと思っております。そのために特に沖縄だけの施策ということで、IIIの内閣府による支援というところは、沖縄県に基金を設置いたしまして、これを使いまして、認可外の施設が認可保育所に転換していくときの支援ですとか、認可外施設なりに資質の向上を図っていただくための取り組みへの支援といったものを進めることにしております。こういった認可化の促進ですとか、認可外施設の質の向上というのは、国や関係自治体をあげて今後も取り組んでいく必要があると考えております。

○小池参事官 11ページでございますが、振興計画の中で不発弾処理対策の推進につ

いても、県民生活の関係で取り扱われておりますので記載をしております。

戦後処理の一環として国が責任を持つということで、沖縄県の特殊事情に鑑みまして、補助率の嵩上げや補助対象の拡大を行うなど、本土に比べて手厚い支援を実施しているところがございます。

それから左下の参考欄ですが、県外から見た沖縄の生活ということで、どう見られているかというデータでございますが、住んでみたい都道府県(2005時事通信社)のデータですが、沖縄県が第1位と。また、魅力的な都道府県・市区町村についても非常に高い評価を得ているという参考データでございます。

12ページ、文化の振興の関係でございます。この分野は非常に幅広いわけですが、主なものということで、最近の動きとしまして、本土復帰30周年を記念して県立博物館・美術館の整備をやっております。

また、文化財の保護の関係で文化財の指定、あるいは国立劇場おきなわの整備などを掲げております。

13ページ。これも参考まででございますが、現在は沖縄出身の方々が様々な分野で活躍されております。ほんの一部の方々でございますが、ご紹介をしているところがございます。

○中村室長 それでは、14ページ、討議のお時間としては午後になりますけれども、科学技術関連施策についてでございます。

この科学技術の振興というのは、第4次、現行の計画で民間主導の自立型経済の構築を目指すということになったことを踏まえて、新たに1つの柱として盛り込まれたものでありまして、その施策のスキームというところをご覧くださいますと、法律で大きなところを明記した上で、振興計画、それから任意のものでありますけれども、沖縄県のほうでも指針とか計画といったものを策定して取り組みを進めるという、そのような体系になっております。

沖縄におきましては、3番ですけれども、振興計画に記載しておりますところ、地理的な要因ですとか、自然条件等で科学技術分野で優位性やポテンシャルがあるのではないかということ述べているところであります。

15ページであります。科学技術関連施策ということで、どういう取り組みをしているかということで、国レベルの話ここでは整理しておりますが、柱立てとして沖縄県の計画を参考にさせていただきながら整理をしまして、「研究開発・交流の基盤づくり」

ということでは、大学院大学の整備など。それから「研究開発成果を生かす仕組みづくり」として、産学官連携体制構築など、その他、次の人材育成の分野にもまたがってしまうんですけれども、「科学技術を担う人づくり」ということで、様々な支援というものも行っているというところでもあります。

16ページをお願いいたします。ここから少し大学院大学の構想につきまして、簡単にご説明をいたしますが、経緯といたしましては、沖縄振興特別措置法や沖縄振興計画で書かれたことをもとに、内外の著名な科学者等の方々に集まっていただいて、どういうふうに具体化していくのかというのを検討していただいたところ、世界最高水準等の実現するために、まず先行的に研究事業を行って国際的な評価を得ることが必要ということで、平成17年に準備のための独立行政法人を設立して、ここで先行的な研究事業やいろいろな準備を行ってきております。

本年の7月に法律ができて、ここにおきましては、学校法人、私立大学の形で沖縄科学技術大学院大学を設置することとした上で、沖縄振興の観点から国が業務に必要な補助を行っていくということで、これをもって法律の目的というところに戻りますが、沖縄の振興と自立的発展、世界の科学技術の発展に寄与するというようにしております。

右側には大学院大学の構想の概要ということで、世界最高水準を基本理念をもとに進めていくこととしておりまして、外部理事の知見なども活用しながら、そういった基本理念の実現に努めていくという体制をとることとしております。

17ページでございますが、この準備の状況でありますけれども、先行的な研究事業というのを、現在、うるま市に施設を沖縄県から借りてやっております、この成果として論文発表ですとか、特許の申請など相当のものがすでに出てきているということになっております。

右側は写真ですけれども、恩納村のほうにキャンパスを現在つくっているところということなんです。

一番下の網掛けになっているところですが、私立大学ということですので、今後、文部科学大臣の認可を取らないと実際には大学として設立できないということですので、これに必要な手続きを進めまして、24年度までの開学を目指しているという状況です。

次に18ページと19ページに、大学院大学を設置することによって、沖縄にとってどういう効果が期待できるのかということをお簡単にまとめておりますが、大きく分けて4つ挙げさせていただいてまして、1つは「科学技術の国際的な拠点の形成」ということで、世

界に開かれた中核的な教育研究機関となることによって、科学技術の情報発信、交流拠点に成長していくであろうということ。

それから、2つ目が「知的クラスターの形成、先端分野における雇用創出」ということで、こういう世界最高水準の大学院大学ができれば、これを1つの核として様々な研究機関やベンチャー企業の集積の形成、それによる新たな産業雇用の創出というものが期待できるというのが2つ目です。

19ページですが、3つ目といたしまして、「科学技術に関する人材の育成」ということで、高度な専門性を持つ人材を育成できる基盤となりますので、ここを基に沖縄の若者が世界レベルで活躍できる場を提供するということです。

世界最高水準を目指すということなので、学生の沖縄枠というものを設ける考え方は今のところ、関係者はもっていないのですが、1つ地元こういうものがあるということで、みんなが頑張ってもらえれば沖縄全体としても底上げにつながっていくのではないかと、うふうに考えているところです。

4番目といたしましては「周辺の生活環境の整備・国際色豊かな地域振興」につながる。キャンパスの周辺にはいろいろな生活基盤、交通基盤等、当然整備することになってまいりますので、それが1つの地域振興になるであろうということでもあります。

4番目はやや短期的にも期待できる場所ですが、それ以外は中長期的に効果が見込まれていくものということでもありますので、そういったものに向けて着実に努力をしていかないといけないということで、今後の課題として挙げさせていただいているところです。

次に20ページであります。これは大学院大学から少し離れまして、一般的な研究開発環境という意味合いではありますが、そういった意味でも研究拠点の整備運営の支援ですとか、バイオベンチャー企業の育成の支援といったものを内閣府においても進めてきておりますし、産学官連携体制の構築という意味でも、TLOの設立などの取り組みが進められてきたところです。今後はこういった産学官連携の取り組みに、先ほど来、ご説明した科学技術大学院大学も参画させていくのがよいのではないかと、それが今後の1つの課題というところで挙げさせていただいております。

以上が科学技術関係でありまして、21ページから人材の育成の分野です。

初めに、学校教育にかかわる分野について2つほどご紹介をいたしますと、まず初等中等教育の関係では、内閣府におきましては、安全・安心で環境に優しい学校づくりというのを全国的には文部科学省が進められておりますけれども、これを特に沖縄に着目した予

算取りなどを行っているというところでもあります。

公立学校施設といいますのは、児童生徒が1日の大半を過ごす活動の場でもありますし、他方、地域住民の応急避難場所にもなっているような場所でもありますので、特に安全・安心につくっていく必要があると考えていまして、全国的にも耐震化というのを一生懸命進めている中でありますが、特に沖縄県の場合、塩害などが非常に激しいこと、それから、特に昭和50年代前半あたりまでは、使っていたコンクリートの質自体もやや劣悪であったということから、右下のグラフをご覧いただくとわかるんですけども、古い建物になってくると、もう壊して建て直さないといけないと。全国的にはかなり補強工事などで、対応もしているんですけども、そういった結果、古い建物も結構残っていますが、沖縄県の場合はどんどんなくなっていくということで、特に古くて危ないようなものというのは、コストがかかる中ではあるんですけども、急いで建て替えていかなければならないということで、大きな課題になっていると認識しております。

22ページをお願いします。高等教育の分野では、沖縄工業高等専門学校の整備は終わっておりまして、これは下のほうの【経緯】というところに書いておりますけれども、「普天間飛行場の移設に係る政府方針」の中で、こういった実践的な技術者の育成等を行う教育機関をつくるという方針が定められまして、それを踏まえて整備をして、運営のほうは今は独立行政法人国立工業高等専門学校機構のほうでやっていたというところであります。整備の予算のほうは内閣府で措置したということです。

この春に卒業生が出ているんですが、就職希望した学生は、この雇用が厳しい状況の中でも全員就職ができたということで、とりあえずはいい実績が上がったのではないかと考えているところです。

○小池参事官 23ページでございますが、関連して産業を担う人づくり、あるいは中高生等を対象とした人材育成として取り組んでいるものをご紹介しますが、中ほどでございますように、アジア青年の家事業。これは、イノベーションを起こす力等を涵養することを目的にしまして、アジア各国の中高生が沖縄に会して体験学習を行う。そういった事業といったものも今行っているところでございます。

24ページでございますが、国際交流に関連する関連指標、あるいは取組例を書いております。国際会議の誘致等についても内閣府として努力しているところでございます。

参考欄には「万国津梁の地」ということで、その歴史、由来についても簡単にまとめております。

それから25ページでございますが、科学技術国際交流に関する沖縄振興開発金融公庫の役割についてまとめておりますが、産学連携のサポートでございますとか、また、下段のほうですが、海外への事業展開を図る企業に対する融資等についてもここで説明をしているところでございます。

また、26ページに同じく公庫の関連。環境、あるいは県民生活等についてのサポートでございます。

地球温暖化対策等の関係、あるいは医療機関に対する支援等についてそこに列挙しているところでございます。

資料4につきましては以上でございますが、資料5でございますが、これは参考資料ということで、お付けしているものでございますが、1ページをめくっていただきますと、CO₂の排出に関するデータ、あるいは漂流漂着ごみに関するデータでございます。先ほどもちょっと触れさせていただいたものでございますが、環境省那覇自然環境事務所からいただいたものでございます。

また、2ページ、3ページも沖縄の自然環境に関する主な施策等についてということで、環境省那覇自然環境事務所のほうからいただいたものでございます。

それから、4ページにつきましては、これは沖縄公庫の融資実績に関する資料をお付けしております。

5ページから7ページにかけては、これは前回の委員会で仲本委員からご質問がございました件について、資料をお付けしているものでございます。

最後の8ページは、今日はちょっとご欠席なんですけど、小室委員からご質問がありました待機児童の解消に関する資料でございます。資料については以上でございます。

なお、お手元にハンドブックが配られておりますが、沖縄経済ハンドブック2009年度版です。これは沖縄公庫から提供していただいたものでございまして、いろいろなデータが入っておりますので、また、ご活用いただければ幸いです。

事務局のほうからは以上でございます。よろしく申し上げます。

○嘉数座長 ありがとうございます。

多岐にわたって、よくまとまった報告書になっているかと思えます。

それでは、次に沖縄県の振興審議会において検討中だと思うんですが、沖縄21世紀ビジョンについて、平良沖縄県企画部統括監からお願いしたいと思えます。10分程度でよろしく願いいたします。

○**沖縄県(平良統括監)** 沖縄県の平良と申します。

それでは、21世紀ビジョンについて資料6-1の概要版、資料6-2の全体版をベースに10分程度お話をさせていただきます。

資料6-2の目次をご覧ください。

前回まではなかなかわかりにくい点がありましたが、今回は「はじめに」があって、「基本理念」、「めざすべき将来像」、これはいろいろな県民からいろいろなアンケート、それからフォーラムとか、いろんな形で十代からお年寄りの皆さんまで含めているような意見を拾ってみたところ、5つの将来像に集約できるということで、ここに書いてある(1)から(5)に整理しました。次に前回説明したときから変わっているのは、この「将来像の実現に向けた推進戦略」という形で、将来像に合わせた形で推進戦略を整理しました。そして、最後に「克服すべき沖縄固有の課題と対応方向」として、以前に合意された大規模返還跡地とそれに伴う県土の再編、それから、離島の新たな展開。交通ネットワークの構築、そして、地方分権と道州制の導入として4つの課題を挙げております。

1ページの「はじめに」のところで、沖縄県が復帰37年経っているわけですがけれども、今日の到達点として人口が復帰時の97万人から138万人を超えて、今後、概ね15年間は引き続き人口は増加していくであろうという推計を我々を出しております。我が国の人口減少が続く中で、若者が多いということは、1つのポテンシャルなるものと考えております。

そして、生活面においては書いてあるとおり、道路、空港、港湾、ダムなどの社会資本については、第1次、第2次、第3次の振計の中で、整備がかなり飛躍的に進んで、県民の生活環境はかなり大きく改善されております。産業面においては、農林水産業や製造業が伸び悩んでいるわけですがけれども、本県の持続的発展の基礎として、地域社会に根ざして県民の生活を支えております。また、観光産業がリーディング産業として大きく飛躍的に伸びております。また、時代の流れの中で情報通信産業がコールセンターを中心にではありませんけれども、沖縄に集積してきたということで新たな展開をみせつつあります。

もう1つは、先ほども資料で説明がありました、科学技術面では大学院大学が、いよいよ具体的になって、平成24年に開学ということで、若者にとって科学技術のシンボルとして、次世代型産業クラスターの核として進められております。しかしながら、雇用問題や基地問題あるいは物流コストの問題とか、沖縄はこういう問題があるということで、「はじめに」のほうで少し整理をして、あと、4ページに基本理念ということで、“時代を切り

拓き、世界と交流し、ともに支え合う平和で豊かな「美ら島」おきなわ”を創造するという
ことで、基本理念として、この間の歴史的な経緯も含めてここで整理しております。

5ページからは、めざすべき将来像で、今回は県民が望む将来の姿、その前に長々と文
章がありましたけれども、これを項目的に整理しております。多少、内容的には重複した
りしているので、再度整理が必要と思いますけれども、「沖縄らしい自然と歴史、伝統、文
化を大切にする島」については、基本的な課題として「自然環境の保全と再生・創造」、そ
れから、7ページの「独特な歴史、伝統、文化」、「風景、景観、まちづくり」、それから「世
界に誇れる環境モデル地域」という形で整理しております。

それから9ページの「心豊かで、安全・安心に暮せる島」でも、同じような整理の仕方
をしております。

そして、課題としては11ページですが、「安全・安心な暮らし」、「健康・長寿」があげ
られます。健康・長寿は非常に厳しい状況になっておりまして、沖縄の男性の平均寿命は
全国上位ではなくなっており、これをどうするかといった大変大きな課題がございます。

また、地域社会がかなり薄れてきて、いろいろな問題等もありますので、地域社会とい
うものを見直そうということで、そういう課題があります。

それから、12ページの「希望と活力にあふれる豊かな島」ということで、ここは概ね
産業振興の部分となっております。基本的課題としましては、14ページの21世紀の「万
国津梁」で、沖縄県は島しょ県、沖縄本島にさらに離島があり、人、物が交流していく上
で交通は大きな課題となっております。最近の那覇空港での物流基地の動きなどを踏まえ
て、課題をいくつか整理しております。

その他の課題として、15ページの「雇用の創出と労働力の確保」があげられます。失
業率の問題等含めてこれは大きな課題であり、産業振興と一体的に取り組む必要がありま
す。それから、「返還跡地の活用」もあります。

それから16ページの「世界に開かれた交流と共生の島」ということで、課題としては
17ページ以降にあります。「国際外交における沖縄の役割」、「国際交流・共生」、国際
協力・貢献」、「平和の発信と世界平和への貢献」という形で整理しております。

19ページの「多様な能力を発揮し、未来を拓く島」の基本的な課題としては20ペー
ジの人間形成があげられます。家庭や学校等におけるけじめ、しつけや道徳心、基本的
にはそういうものをしっかりしていく必要があります。そして、教育では確かな学力の定着
や地域社会における教育が必要です。

また、21ページにおいて人材育成という形で課題を整理しております。

そして、22ページから前回にはなかった、「将来像の実現に向けた推進戦略」ということで、1つは歴史、伝統、文化を大切にす島のグリーン・イニシアティブということで、いろいろ書いてあります。これは、総合部会でもいろいろ議論しまして、大きな項目で整理しております。将来像の実現に向けて例えばこういうイメージですということで、20年間の取り組みですので、細かいことは、今後、県では3年ぐらいのスパンの事業実施計画、あるいは10年スパンの計画等に落としていく考えですので、参考になるような形で事業ベースに落としていくということで、今、いろいろ検討しているところです。

それから、25ページではセーフティネット(安全網)の形成戦略とか、食と風土と技術を活かした健康長寿地域づくり戦略とか、あるいは共助・共創型地域づくり戦略という「心豊かで、安全・安心に暮らせる島」実現への推進戦略を記述しております。

それから、27ページも同じように産業振興のところですが、「万国津梁」形成戦略ではどういうことをやっていこうということで、ここに大体のことを書いてあるわけですが、地域産業の振興戦略、これは主に製造業とか農業とか、建設業等を前提に整理しております。

そして28ページの沖縄新・リーディング産業育成戦略ということで、観光を新たなレベルに引き上げる取り組みとか、あるいは健康バイオとか、情報系とか、そういうものをさらに高度化していこうということで、いろいろ整理しております。これももう少しわかりやすく整理し直す考えです。

29ページも同じような考えです。

それから、31ページの「世界に開かれた交流と共生の島」も同じように項目を整理しまして、いろいろ書いております。

それから、33ページは「多様な能力を発揮し、未来を拓く島」ということで、これは教育の部分です。人づくり戦略、良好な教育環境づくり戦略、産業人材の育成戦略ということで、人材はこの部分で戦略として集約してあります。

それから、35ページになりますが「克服すべき沖縄固有の課題」、先ほど申し上げたように、大規模な基地返還跡地に伴う県土の再編ということで、これをどう有効に活用していくかということは、ある面では沖縄県の県土の再編にもつながるような話になりますので、固有の課題の1番目に挙げております。この中では中ほどにありますけれども、「住民の安全・安心確保のため、条件整備を徹底すべく、日米地位協定の見直しなど必要な協議・

措置の実施を求めていく必要がある」と。

「このことを踏まえ、今後の大規模な基地返還跡地については、日米両政府の責任の下において、跡利用が適切に進められなければならない」ということで、これについては、国の責務としてきちんと完了するべきだということ、ビジョンの中では位置づけております。

基地については36ページですが、普天間飛行場等、嘉手納から南の在日米軍再編協議の中で合意された大規模な基地返還が実現した後も、広大な米軍基地が残るということで、これについては、引き続き基地の整理縮小を進めると書いてありますけれども、総合部会では米軍基地のない県土のあるべき姿ということで意見等が入りまして、米軍基地のない県土のあるべき姿を目標にしながら、引き続き基地の整理縮小を進めるといような形の修正意見等が出ましたので、こういう方向で修正して、県の審議会に上げるという考えです。

ここに書いてある①大規模な基地返還跡地、1,000～1,500haの大規模な返還跡地をどう活用していくかということで、この中で交通ネットワークの再編、後のほうに出てきますけれども、軌道系交通を含めた名護市方面に至る本島を縦貫するような軌道系交通等の位置づけもしております。そういう形で今整理をしております。

離島についても、39ページあたりに書いてありますが、そこはご覧いただきたいと思っております。大体そういう形で整理しております。以上です。

○嘉数座長 ありがとうございます。

国の審議会を含めて、これで3回目のご説明を受けますが、毎回間違いなく充実していると思っております。これはいつ頃、最終報告が出てきますか。

○沖縄県(平良統括監) 今のところは審議会があと2回、総合部会は終わりましたので、審議会のほうで、年内、場合によっては1月の中旬に答申をいたしまして、最終的には県議会の全員協議会を経て、3月下旬には策定という予定で考えております。

○嘉数座長 よろしく申し上げます。

それでは、本日、午前中に取り上げます環境、県民生活、文化について討議を進めていきたいと思っております。

この3つの分野につきましては、ご承知のように沖縄の特性発揮の分野でありまして、また課題も山積しております。討議に先立ちまして、田中律子委員から基調発言をいただきたいと思っております。田中委員、よろしくお願ひいたします。

・基調発言 田中律子 沖縄振興審議会委員(ゲストスピーカー)

○田中委員 皆さん、おはようございます。

NPO法人アクアプラネット、この委員会に任命されたときには会長を務めていたんですけれども、先月から理事長を務めることになりました。今日は短い時間ですけれども、サンゴのお話と、私の大好きな沖縄ということでお話をしたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

お手元にアクアプラネットの資料のほうをお配りしてあるんですけれども、今日はこの資料とは関係なくお話をしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

私がダイビングを始めたのが中学2年生の14歳のときでした。その当時、モデルをしていたんですけれども、当時の南西航空、今のJTAですね。飛行機の機内誌の撮影で西表島に連れて行ってもらってダイビングをしたのが私の初めての沖縄、そしてダイビングという経験でした。もう24年前になるんですけれども、本当にその当時の西表島はものすごくきれいで、潜った瞬間、ピンクやブルーや、本当にきれいなサンゴ礁が目の前に広がっていて、そのサンゴ礁の中ではさらに色とりどりの本当にきれいなかわいい熱帯魚たちが泳いでいて、地球というのは私たちが住んでいるこの陸上と、また、もう1つこの海という竜宮城のような世界だったんですね。こんな世界があるんだと教えてくれたのが、この沖縄でした。

私は24年前からもうずっと沖縄が大好きで、ダイビングもやっていて、世界中の海を潜ってきたんですけれども、私の中では、いろんな海を潜ったんですけど、この沖縄の海が世界一きれいだと私は思っています。でも、この20年でどんどんどんどん潜るたびに何かおかしいと感じるようになって、魚が少し減ってきた。それから、今まで潜っていたポイントで、同じところで潜らなくなってきたんですね。なぜかという、どんどんサンゴが死滅しているんです。

一番最初に私が本当に感じたのが、98年のエルニーニョ現象が起きたときでした。その当時まだ温暖化という言葉とか、白化現象ということも私は知らなかったもので、同じ慶良間諸島の座間味という島で潜っていたんですけれども、その当時、ブルーとかピンクとかグリーンとか、本当にきれいなサンゴ礁が広がっていたんですが、同じところで潜ったある日、その色の付いていたサンゴがあたり一面、全部真っ白だったんです。本当に紙のような真っ白なサンゴ礁が広がっていて、あれ、どうしたんだろうと。でも、なぜか私はそのときすごくきれいと感じてしまったんですね。船にあがってきてから、船長に「これ

はサンゴが死ぬ直前なんだよ」と教えてもらいまして、「白く化ける」と書いて「白化現象」というんですけれども、なぜこんなことが起きてしまったのか。

皆さん知っているとは思いますが、サンゴというのは何だかご存知ですか。動けないし、ちょっと見た感じ石のような感じもするんですけれども、サンゴというのは動物なんです。年に1回卵も産むし、本当に素晴らしい生物多様性の海の熱帯林、海の森というのがサンゴの役割なんですけれども、そのサンゴがどうして動物でああやって生きているのかというと、イソギンチャクの仲間なんです。よく見ると自分で触手のようなものを伸ばして、それでごはんを食べているんですけれども、それだけではサンゴは生きていけなくて、サンゴをよく見ると「ポリプ」という毛穴のような穴がいっぱいあいているんです。1つ1つがポリプというんですけれども、その1つ1つがサンゴなんです。それがどんどん、どんどん固体化して行って骨格をつくって行ってサンゴになっていくんですけれども、その穴の中に褐虫藻という植物プランクトン、藻が共生しています。その褐虫藻が太陽を浴びることによって光合成をして、酸素や栄養をサンゴに供給してくれているんです。それでサンゴが生きていくことができるんですけれども、温暖化ということで、今どんどん海の中の温度が上がっています。海中の水温が30℃以上になってしまうと、人間にとっては海に遊びに行くと暖かくて気持ちいいという感じなんですけれども、この1℃、2℃の上昇というのが魚やサンゴにとっては本当に致命的な温度なんです。30℃以上に超えてしまうと、褐虫藻がサンゴの中から暑くて逃げてしまうんです。そうするとサンゴは酸素や栄養を供給してもらえなくなって白化現象という、本当に真っ白になってしまってサンゴが死んでしまうという、白化現象は本当に死ぬ直前なんです。

その98年のエルニーニョの後に、真っ白のサンゴ礁、そのまた1年後に慶良間諸島で同じところに潜ったんですけれども、そのときには真っ白なサンゴすらもなく、もうぼろぼろにサンゴが折れてしまっていて、その折れたサンゴには藻が付いて、あの色とりどりだったきれいな海はもう跡形もなく、魚も一匹もいなくて、まるで墓場のようなグレーの海になってしまっていたんです。たった1年でこんなことになってしまうのかと。これは今何とかしなければいけないなと思って、このNPO法人アクアプラネットを立ち上げまして、今、私は沖縄でサンゴの保護と移植を行っているんです。

先週の11月7日、土曜日に沖縄の北谷沖でサンゴの移植イベントを、アクアプラネットが行いまして、全国からサンゴが大好き、沖縄が大好き、そしてダイビングが大好きと

いうボランティアダイバーの方々が集まってくださりまして、今回も100本ほどのサンゴの苗を北谷沖に移植をしてきました。

この移植なんですけれども、サンゴの親株というものがあまして、これはもちろん県のほうに申請をして許可をもらって取ってきているんですけれども、その親株の先端を親指ぐらいの大きさにまず折るんですね。折ったものを今度は水槽のほうに、素焼きで焼いたTの字型になった、私たちが「コーラルピン」と呼んでいるものがあるんですけれども、その素焼きで焼いたピンの上に折ったサンゴの苗をのせておくと、3カ月ほどで素焼きのピンを包み込むようにサンゴが成長していくんです。3カ月ほど水槽で育てたものを、今度は海のほうに持って行って、サンゴが死んでしまった岩場のところに水中ドリルで穴をあけて、そこにT型のピンになっているので、それを差し込んでという形で移植をするようになっています。

地球の70%は海ということなんですけれども、この海の中で70%のこの地球の中では海なんですけれども、サンゴ礁というのが0.3%しかないんです。その0.3%のサンゴ礁の中に、海洋生物、魚とか魚介類、いろいろな生物たちの65%がサンゴ礁に何らかの形で携わっているといわれています。だからある意味、サンゴがなくなると魚もいなくなってしまうという状態なんです。サンゴがなくなってしまうと、魚が食べられなくなってしまう状況もあるかもしれない。

(映像)

この説明をしていてもなかなか難しいので、実際に私が海の中でサンゴを移植している映像がありますのでこちらのほうをご覧ください。

これです。こんな素敵な海が沖縄には広がっています。これは慶良間諸島です。私の大好きなところですよ。

こうやってサンゴが生物多様性の場として、魚たちの卵を産む場所であったり、子育てをする場所であったりということになっています。この小さな魚を食べに、また、もっと大きな魚が来て、そのもっと大きな魚を食べに、もっともっと大きな魚が来るという食物連鎖が海の中でもできています。

このところどころ白くなっているところ、これが白化現象です。これです。最初に見たときには本当にきれいだと思ったんですけれども、これが褐虫藻が抜けてしまって、サンゴが死ぬ直前です。これが半年経つとぼろぼろになってしまって、藻が付いてしまって死んでしまうということです。

ここが北谷沖で移植をしている場所になります。このかごがかかっているのが全部サンゴを植えたところです。これが素焼きのサンゴのピンです。こうやってくっついていくんですね。このピンを包み込むように、今度は成長していきます。水中ドリルで穴をあけたところに差し込みます。岩場とサンゴがきちんとくっついていないとサンゴはなかなか成長しないので、岩にきちんとくっつけてあげる形で移植をします。T字のところがスクリー状になっているので、そこに砂をかませるように砂を入れていきます。この砂もT字の素焼きのピンのほうもすべて沖縄の素材でつくっているものなので、もし台風がきて折れてしまっても自然に帰るといふ、すべて自然の素材でやっています。

ボンドを使って移植をしているところとか、いろいろあるんですけども、私たちは素焼きのピンを使って移植をやっています。

砂をかませてあげた後に、今度はこれが抜け出ないように、これはヘチマです。乾燥ヘチマを小さく切って、これをふたの代わりに抜け出ないように穴のところに差し込んでいきます。

差し込んで、これで1本の移植が終わります。大体私たちは1時間から2時間ぐらい潜るんですけども、みんなで潜って200本から300本、こういう形で移植をしています。

最初は、この親指ぐらいの大きさのサンゴなんですけれども、半年経つと手の平、こぶしぐらいの大きさに成長して、1年経つと手の平を広げたぐらいの大きさになります。これはまだまだ赤ちゃんなので、これを食べに来る魚とか、オニヒトデから守るためにこのかごをかけてあげます。大体2年です。2回春を越えると、成長したサンゴが産卵をするので、今はまだこれは箱入り娘でしばらくこうやってかごをかけておいてあげます。こういう形で移植が1本終わりという形になります。

今までこの岩場のところに約2万本のサンゴを移植してきました。私たちは、今、水槽のほうでは5万本のサンゴの苗を育てています。これは私が3年前に移植をしたサンゴです。親指ぐらいだった大きさのサンゴが、今、ここまで成長しています。でも、2回春を越えたので、かごを外してあげてもいいんですけども、ちょっとかわいいので、まだまだ箱入り娘の状態のままかごをかけてあげています。

このサンゴも一昨年産卵をするようになったので、これが私の子供で、卵を産んだのが孫という形で、きっとこれが黒潮にのって九州のほうであったりとか、いろんな海流にのって行ってサンゴの赤ちゃんがきっと育っているのではないかなと思っています。

ここは移植を始めたときには、魚はいなかったんですけども、最近どんどん、どんどん魚が増えてきているので、やっぱり魚にはサンゴが大事なんだなと感じています。

これが産卵です。これも慶良間のサンゴの産卵です。こんなにたくさん卵が生まれていきます。この穴の中がわかりますか。穴1つ1つがサンゴなんです。これがポリプといって、そこの中から卵が出ていきます。これが潮に乗って行って、海流に乗って、また、岩場に付着をして、ポリプからまたサンゴがどんどんどんどんできていきます。

こんなテーブルサンゴになるのにも、やっぱり20年、30年という月日がかかるんですね。

温暖化によって海水温が上昇することによって、20年、30年かけてそうやって成長してきたサンゴも本当に一瞬で死んでしまうので、温暖化はもっともっと気をつけてみんなの力で防げないかなと思っています。

(映像終了)

このような映像なんですけれども、サンゴというのはやっぱり本当にいろんな恩恵をもたらしてくれていると思います。

何で沖縄の海がきれいなんだろうというと、やっぱりサンゴのおかげ。白い砂浜ができるのは何でだろうというと、やっぱりサンゴ礁を食べる魚たちがいて、その糞もあったり、いろんなものがあって白い砂浜ができてくるんですね。なので、観光に対してもサンゴは大切ですし、そして島のみんなを守ってくれる防波堤の役目でもありますので、そういう意味でもサンゴは大切。

私は移植のイベントをすると、ダイバーの資格を持っていないと、今、参加ができないんですけども、ダイバーだけではなくて、海が大好き、沖縄が大好きという、子供たちに対してサンゴ礁ってこんなに大切なんだよ、魚にとってこんなに大切なんだよということを教えてあげる教育というか、そういうものやっていたらいいかなと思って、私ごとなんですけれども、うちの娘が小学校5年生なんですけど、今年の夏には、東京のほうから学校で5年生が全員「夏の学校」ということで沖縄にきまして、そこでみんなでサンゴの株分けです。サンゴの苗をポキッと折って乗せるという行為だけなんですけれども、そういうことを子供たちに手伝ってもらって、そうしたら子供たちが「あ、サンゴぬるぬるしている」とか、「サンゴ、どんな臭いがする？」って聞いたら、「ポテトチップスの海苔塩の臭いがする」とか、子供たちって本当に素晴らしい感性をもって行って、こういう子供たちに、環境ってこういうことなんだよって、海はこうやって守っていかなければいけな

いんだよと教えると一番吸収してくれるんですね。だから「お家に帰ったらお母さんが洗い物をしていたらちゃんとお水を止めてねと教えてあげてね」とか、そういう話をすると、「僕もこれからシャンプーするときはシャワーを止めるね」とか、みんなそうやってわかってきてくるので、これからもっともっと沖縄県内の小学校もそうだし、県外から来てくれる修学旅行であったりとか、そういう子たちのためにもいろいろなトークショーをやったりとか、サンゴの株分けの体験をしてもらったりとか、体で感じて心で子供たちがどんどんわかってくれるといいなと。そういう場所を今つくろうと思って、サンゴの畑ということで、今読谷村のほうにつくっているのですが、そういう活動も続けていけたらいいかなと思っています。本当に今沖縄は埋立とか、いろいろな問題があると思うんですけども、埋め立てをしてしまったら、やっぱり二度と戻れないですし、こうやって自然というのは、何千年、何万年かけて自然は生きてきて営みを続けているので、壊してしまうのは一瞬なんですけれども、それをもっと考えてこれからは共存ですね。自然と人間と一緒に生きていく、そういうエコなんだよと。沖縄はこうやって大事にしているんだよということをもっともっとアピールできていったらいいかなと思います。

これからもこのサンゴの移植と保護の活動を続けていきたいと思っています。今、パラオとも一緒に連携をしていこうと、沖縄だけではなくて、世界中で、アジアとか、サンゴ礁が生息しているところと連携をとって行って、もっと大きな活動ができたらいいなと思っていますので、皆さんもぜひアクアプラネットの会員になっていただけたらうれしいかなと思います。今日はありがとうございました。

・自由討議

○嘉数座長 田中さんありがとうございました。

地球温暖化問題というのは、ご承知のように、鳩山内閣の最重要課題の1つでもありまして、チャレンジ25、いわゆる温暖化ガスを20年までに90年比で25%削減するという相当意欲的な目標を出してありまして、それに伴いグリーンイノベーションとか、いろいろなアプローチがなされつつあります。

先ほどパラオの話が出ましたが、実は私も先週パラオに行きまして、その海洋研究所、サンゴ礁を中心とした研究を続けている場所にいきまして、沖縄のサンゴの再生技術について大変注目してありまして、来年2月に沖縄でシンポジウムを持ちたいというふうに思っておりますので、そのときはまた田中さんにご協力をお願いできればというふうに思っております。

それでは、事務局の報告、県の21世紀ビジョンのご報告、田中委員の基調発言を踏まえまして、これから議論いたしたいと思っております。

本日、総合部会の委員で藤田委員がお見えになっていまして、藤田委員は環境問題の専門家でありますので、まず藤田委員に口火を切っていただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

○藤田委員 琉球大学の藤田でございます。突然のご指名ですので、何も準備してないので、うまく話せるかどうかかわからないのですが、私は環境経済学を専門としておりまして、今の田中さんのお話を伺いながら、私も同じ経験をしてきたなと思っていたのですが、私もちょうど環境に興味を持ち始めたのが二十数年前、初めて沖縄に来て、私の場合は小浜島でシュノーケリングをしたとき、えも言われぬ感動、これがきっかけになっております。その後、ブランクがあきまして、10年前に沖縄の琉球大学の教員として赴任いたしました。そこで初めてダイビングを始めました。慶良間を中心に遊びですが潜り始めて、やはり沖縄の海は先ほど田中さんもおっしゃっていましたが、私もそんなに海外で潜った経験はありませんが何箇所が潜りました。ダイビングのメッカと言われるところでも潜ったことがあります。それでもやはり沖縄の海の繊細さと美しさというのは、海外に引けをとらないほど素晴らしいものがあるなと思っております。そういう意味で、沖縄の優位性というものを保ちつつ生かすという方法は何かないかというふうに常々仕事を離れた部分でも考えているわけですが、私は自然環境保全という意味で、私の仕事とどのようにかかわっているかという、環境保全の経済価値評価というものをやっております。

先ほどの事務局からのご説明の資料4の4ページの真ん中の丸四角の中に小さく参考という形で書き加えていただいているんですが、サンゴ礁の経済的価値というものを昨年だったか一昨年だったかと思うんですが、環境省のほうでまとめてくださっています。これに私少しかかわっております、どういった形でどういう手法で評価することが適切かというような議論に加わらせていただいたことがあります。

ここに書いてある年間2,300億とか、107億とかいうのは、非常に確かこれは沖縄だけではなくて全国のサンゴ礁の経済価値評価ですので、算出基準としては、悪い言葉で言えば非常に粗いものなのですが、とにかく一度こういう形でサンゴ礁の価値の大きさというものを何かほかのものと比べられる形で表現できないか。とにかく、それを一度示すことが大事だということがありまして、もう雑でもいいから、とにかく出そうということを一の目的にして取り組んだのがこの経済的価値評価でした。細かいことを言えばいろ

いろと検討しながらやりなおさなければならぬところもあるんですけども、このようにして、どうしても自然環境保全というのは、それを進めていくにはその部分の経済開発が阻害されるというマイナス部分がありまして、では、どちらを取るかと、どうしてもこの2つはトレードオフの関係になってしまいますので、やはり最後の意思決定としてはどちらを取るかということを考えていかなければならない。そのときに、こういった1つの指標を加えることができれば、地域の住民であるとか、地域の行政の方たちが判断する1つの手助けになるのではないかということを取り組んでいるわけでございます。いろいろと議論のある手法ではあるんですけども、こういった考え方もあるということをごさには知っておいていただきたいと思い改めて言及させていただきました。

それから、先ほど嘉数座長からもありました温暖化の問題なんですけれども、沖縄は温暖化に取り組んではいるわけですけども、やはりその効果がなかなか出てこないということで今悩んでいるところであるというふうに認識しております。

やはりどうしても大きな製造業がありませんので、産業から排出というのは、おそらくそれほどほかの地域と比べて問題になるわけではないと思うのですが、やはりどうしても車社会であるということ、離島をたくさん抱えているということ、何かしようとする、必ず輸送・移動に伴うCO₂の排出が避けられないという部分があるわけですね。

そこで、宮古島などで取り組まれているバイオエタノールの取り組みであるとか、あるいは民間レベルでもいわゆる最近よく取り上げられるスマートグリッドと言われるものですね。そこに着目した取り組みがなされているということも少し伺ったことがあります。

いろいろなアプローチで積極的に取り組んでいかなければならない沖縄というのは、全国的にもその環境の素晴らしさということが認識されているところですので、なかなか様々な事情があつて、取り組め取り組めと言われても先立つものがないんだよとか、あるいは人的パワーもなかなか確保するのが難しいということもあるかもしれませんが、率先して取り組むということに対して、ほかからの理解も得やすいと思うんですね。

ですので、とにかく様々な積極的なアイデアを出して行って、その中から取り組むべき優先順位をつけて、どんどんとにかく取り組んでいくということが大切だと思います。

先ほどの田中さんの取り組みなんかもそうだと思うんですけども、とにかく何かをやってみること、沖縄にはそれが今求められていると思うんですね。特に環境というものは、これは私の個人的な見解なんですけれども、取り組む過程も大事なんですけれども、結果が求められる。結果が伴わなければ何の意味もないというものだと思いますので、少しず

つでも一步一步でも結果を着実に出していく、いきなり大きなところに到達しなくても、少しずつ取り組んでいくということが必要なのではないかと思います。そういった意味で具体的な施策をとにかく積み上げていくというやり方が今の沖縄の環境政策の中には必要なのかなというふうに普段から考えているところでございます。ちょっと漠然とした意見ではございますが、今私の考えていることはこのようなところですよ。

○嘉数座長 ありがとうございます。これは確か藤田さんが計算したのかな。このサンゴ礁の経済的価値がここに出ていますよね。これはCVM(Contingency Valuation Method)仮想評価法に基づく数値ですか。

○藤田委員 これは私が計算したのではなくて、環境省のほうでやっていただいたもので、観光レクリエーションについては、旅行費用法という、沖縄に来るのに幾らかけているかというその方法で、商業用海産物というのは水産物、これは方法論としては、生産高法でやっています。海岸防護機能というのは、これは算出機能がどうなっているか記憶が薄れてしまったんですけど、サンゴ礁には天然の防波堤機能があると言われていています。ある程度科学的にもその部分は立証されているところなんですけど、これを人口の防波堤に置き換えたときに幾らかかるかという代替法といわれる方法を使っていると思います。

○嘉数座長 わかりました。これはこの計算というのは、非常に重要だと思ってまして、座間味村では、確か環境税とか入島税というんですか、こういう計算をもとに何パーセントにセットするかという実験がなされているのではないかというふうに思っております。ぜひご研究を続けていただきたいと思っております。

それでは、この温暖化、環境問題というのは、さっきの藤田さんのお話でも、経済と環境保全というのは、トレードオフだというお話をなされていましたが、今の鳩山内閣は、決してトレードオフではないというスタンスだと思うんです。そういうことを含めまして、特に沖縄での取り組み等についてご発言いただきたいと思っております。どなたでも結構でございますので、お願いいたします。

○藤田委員 トレードオフの関係の話なんですけれども、自然保護と森林であるとか、海を開発するということはどうしてもトレードオフの関係になると思うんですが、温暖化対策に関して言えば、今は皆様もご存知のように、様々な技術あるいはソフトの面での技術開発も行われていまして、必ずしもトレードオフにはならない部分もあると思います。

1つには、様々な環境政策の分野で、環境税もそうなんですけれども、排出量取引の話題が今どこでも上っていると思います。これに関しては、早くスキルを身につけて、取り

組んでいくことが必要になるかと思えます。これは好むと好まざるにかかわらず、すでに始まっていることですので、これに乗り遅れてしまうと、なかなか自力で目標を達成するというのは、どこも難しいと思うんですね。どうしても相殺していくという考え方を一部は取り入れていかなければ、実際に結果を得ることができなくなってしまうということがありますので、沖縄としてでも排出量取引、これは京都議定書の枠内でのクレジットの売買もありますし、それから今 J-VER（ジェイバー）といたしまして、日本の国内のみで使えるクレジットを使ったカーボン・オフセットを取り入れている自治体あるいは団体・民間企業などもたくさん出てきております。そのあたりのスキルを早く沖縄としても構築して、県の温暖化対策に加えていくということが必要なんじゃないかと思っています

○嘉数座長 はい、どなたかございませんか。

○池田委員 私は環境のほうに専門というか少し近いので、幾つかお話ししたいんですけども、今回サンゴ礁の再生とかを含めて割と海の環境の話があるのですが、資料等を見ても自然環境の保全に向けて何をやったのかというのがよく見えなくて、再生のお金は出した。でも保全そのものはどうなのかというと、みんな計画をしたり調査をしたりというぐらいで終わっているんです。具体的に保全といっても事業として何をやるかというのがなかなか難しいのかもしれませんが、緑の保全であったり、それから海の保全であったり、簡単に言えば海岸・海浜のほうは、県民の共有財産なのに、そこにリゾートホテルがプライベートビーチ風に建ててしまったりとか、いろんな海岸線が占拠されたり、いろんな開発が起きている。これをやはり食い止めるという規制とかそういうものは非常に重要で、そこについて保全対策がどうなっているのかということが、この中の資料ではあまりされていない。それで今日は環境省の方もいらっしゃるんで、西表のほう、石垣島でも今日の資料のところでも、先ほどの資料4の5ページの上のほうに、西表石垣国立公園の話がありますけど、実はこのところで石垣島全体に管理計画を最近策定していただいて、私もそれにかかわったんですが、その中で石垣島が景観も含めた「風景づくり条例」をつくってしまっていて、その中のいろんな開発、建築規制行為、すべてのいろんな基準ですね。それを国立公園の管理計画にほとんど取り入れてもらった。要するに自然公園とそれから市がやっている景観条例とをしっかりとドッキングして進めていくという一体的な動きがある。こうやって自然を守っていこう。それから開発コントロールしていこうという動きがあるので、こういうようなものは今回の県の21世紀ビジョンの中でも自然保全と同時に風景景観づくりというのは柱に入っていますので、ぜひそういう方面で今後しっかりやっ

ただきたいなと思うんです。

ちょっと細かい点なんですけど、最近浦添である方とお話をして、地域にマツ林が結構あるんですね。これは県内各地にあるんですけど、マツ林のマツ枯れが結構目立ってきて、マツクイ虫があるんですけど、これを私何とかしてもらえないかということで市や県に相談したけれども、民有地なので何もできないということと、せめてマツクイ虫の状況の調査ぐらいしてもらえないかということ、お金の出所もないと。要するに、地域森林だとか保安林だとか何か指定されていれば動けるんですけど、そうじゃない民有地については何もできないんですね。とても心配しているのは、どんどんマツ枯れが広がって行って、ぼっと広がるのではないかということをすごく懸念してまして、こういう地域が持っているいろんな緑の資源を保全するにはどうしたらいいのかという、こういう細かいことなんですけど、そこがなかなかいかない。私など斜面緑地といわれる沖縄がひだのようにいろんな斜面緑地があって、これが民有地が多くて保全されない。ですから、海・大きな森林も大事なんですけど、同時に生活に近い都市も含めて、いろんなところに緑の資源があって、これがなかなか守られていない。どんどん侵食されているんですね。ですから、こういったものの保全もぜひ考えていただけないかなと思っております。

あと1点ぐらいちょっと付け加えさせていただきますと、県のほうで沖縄本島地域の海岸線を自然護岸で再生するという事業を今動かしています。テトラポットはなかなか消せないんですけど、コンクリート護岸というものを石とかを含めた自然護岸に変えていくという事業です。いろんなそういうところからも自然回復が可能だとは思っていますので、そういう事業の推進とかを含めて今後もぜひ考えていただきたいと思います。

○嘉数座長 ありがとうございます。

奥田さん、せっかくいらしているのでお聞きしたいのですが、先ほど計画は立てるのですが、なかなか実施してくれないということなんですけど、何かコメントをいただけませんか。

○環境省(奥田所長) 資料5というところの2ページと3ページに、私どもの政策みたいなものを若干紹介させていただいております。例えば、自然環境の保護を拡大するというところについて言えば、琉球諸島全体を世界自然遺産として目指すということを考えております。これは、沖縄の国立国定公園という3ページ目の2のところの上のほうに書いてありますけれども、世界自然遺産の国内候補地になっておりまして、それを念頭に国立公園の新たな拡張ですとか新規の指定ということで、やんばるの地域での新たな国立公園

の指定、それから西表石垣の既存の国立公園の拡張というのを、今進めているところでございます。具体的に目に見えるような形になるまでは、地元の方々との意見調整に時間が必要であり、こういったものが地域の振興にいかに関わりつるかという観点で理解を求めて、地域の人たちと一緒にこの計画づくりをしているところです。これが具体的な事業ともつながってくるのであると思います。

あと、その下にもあるように、具体的な外来種による被害がいろいろ問題になっています。この中には、沖縄県とともに年間合わせて1億円を超える事業で、世界の中でもどこもなし得てないという、北部地域でのマングースの完全駆除を平成26年度までの実現を目指してやる、といったような事業があります。こうした事業により環境の改善ということで、目に見えた効果が今出てきているところだと思えます。

○嘉数座長 ありがとうございます。

あまり時間もありませんので、次に進みたいと思っておりますが、この温暖化問題は、次のテーマともかかわっておりますので、その中でもまた議論していただければと思っております。

先ほどのご報告の中にありました県民生活ですね。健康長寿とか、癒しの風土とか、少子高齢化等々についてご報告がありました。それを踏まえまして、ご発言をお願いしたいと思っております。

県民生活の基本的な資料を幾つか挙げていますが、この中で例えば生活保護世帯の率、多分沖縄はかなり高い部類に入るのではないかと思います。このあたりの資料もあればぜひ掲げていただきたいというふうに思っております。

どなたでもよろしいですので、どうぞ。

○中島委員 県民生活資料4の8ページ、2-2県民生活でございますけど、医療提供体制で、県立病院・県立診療所・公立病院、こういうのが中心になっているんですけど、比較的沖縄は徳洲会をはじめとして、民間の医療施設もずいぶん目につくんですが、その動態というのはどのようになっているのか、それも総合的に知りたいというので、これは質問でございます。

○嘉数座長 中村さん、何かデータがありますか。

○中村室長 本日のこのデータの中では、実際に内閣府のほうでかかわっている部分に限定した形になってしまっておりまして、そういう意味ではご議論いただく中で、もしかしたら十分でないような場合があるかと思っておりますので、本日このようなことで間に合わな

い形にはなるんですが、もしよろしければ今日に限らず、今後皆さんにお考えいただくための材料として、県とも相談をしてデータ集を考えたいと思います。

○嘉数座長 先ほどのご説明を聞いていますと、医師不足というよりは地域的なアンバランスというお話でしたよね。やはり離島とか北部過疎地域あたりでは不足が顕在化しているということですかね。医師の需給関係から見ますと重点地域はこのあたりだということになるんですか。

○中村室長 それは総体的なデータから見ますと、そのようなことが伺われるということで、もちろん例えば本島の南部でも個別に見れば産科とか小児とかそういった分野というのは今日の説明ではそこまで掘り下げられてはおりませんけれども、もしかしたらそういう個別の分野では課題はあるのかもしれないなと思いますので、そういった点も併せて先ほど申し上げた今のデータ集の中では工夫ができればと思います。

○嘉数座長 病院経営についてはあまり触れられていないんですが、例えば県立病院というのはまだ赤字が続いていて大変なんですか。

○中村室長 そのように聞いております。

○嘉数座長 大澤さんでしたか、前回病院経営のお話をなされていましたが、コメントいただけませんか。

○大澤委員 今おっしゃった県立病院のほうは非常に経営が悪いということだと思うんですけど、民間でも非常にうまくやっているところもあって、例えば中部に中頭病院というのがありますがけれども、ここなんかは稼働率が100%を超えていて、全国でも有数の非常にいい経営をしている病院というのがあります。

最近、比較的研修医の方が沖縄に集まるという傾向もあって、これは弁護士さんとか会計士さんも同じだと思うんですけど、やはり沖縄の魅力、まさに沖縄の持っているすばらしさというのに人間が引きつけられて、むしろここで医療に従事したいという方が増えているということで、全国でも研修医が減っていて非常に医師不足に悩まされているところもあれば、沖縄県のようにむしろ増えているというところもあるというふうに理解しております。

○安田委員 両方合わせて全体で、県民生活を1つ例にとってお教えいただきたいんですけども、この7ページには県民生活の一番大事な部分である県民の所得というのはどれぐらいにするかというのが、要するに何年後いくらにしてという議論はないような気がするんですね。21世紀ビジョンも20世紀の最後のときに、沖縄県の皆さんはどういう

生活になっているのかということについての議論がないと思うんですよ。これは環境問題に関係すると思うんですけど、先ほど藤田先生がおっしゃった、では自動車はどうするか、県民の所得が上がればどんどん移動距離が増えますからその手段が必要ですよ。そうすると、ガソリン使わないで最後は電気自動車にしようかという議論もあるんですけど、電気自動車は電力を食いますから、沖縄の電力をどうやってつくるかと。これを火力とか何かでやれば、冷やすための海水温度が上がります。あるいは火力のためのCO₂が増えますよね。原子力というと、多分沖縄は住民のいろんな議論から原子力ができないと思うんです。そうすると、沖縄は電力に関して、あるいは自動車に関してゼロサムでいくのか、それともどんどんバッテリーを本土から運んできて電力でもらってくる。そうすると一応ここではCO₂が出ない状況にはなりますよね。そういう格好でゼロサムにするのか、それともゼロサムにできないからどうするのかというようなことを、まず21世紀ビジョンで考えなければいけないのではないのか。その計算はできるはずだと思うんです。効率はちょっとわからないんですけど計算はできると思うんですよ。ですから、藤田先生にちょっと計算を教えていただいて、ゼロサムになるか。それが100年後だとすれば、20年後は我々はどうしているということがこの県民生活のほうに出てくるんじゃないかと思うんですけど。そういった計算というのは、やはりそろそろここまで整ってきたら、じゃあどうしようという議論が出てもいいんじゃないかと。だから今すぐという問題ではないですけど、しかしそういう計算をする将来の全体像がどうなっているかということをやちょっと見せるという、そういう議論も必要ではないかということをやちょっと思ったので、ぜひそういう計算をしていただければありがたいかと思います。

○嘉数座長 どなたかほかにございませんか。

今のお話は重要だと思いますが、再生エネルギー、太陽光も含めまして、21世紀プランの中でどの程度再生エネルギーで電気を供給しようとしているのか、あるいはバイオマスというのもずいぶん宮古・伊江島でやっていますが、そういうのも含めてエネルギーの総合的なプランが必要じゃないかと思うんですが、平良さん何かありますか。

○沖縄県(平良統括監) 大変もつともなご指摘で、実は21世紀ビジョンの議論の中でも電気自動車も結局は電気から充電する。そういう問題がいろいろありますね。その太陽光パネルの話もいろいろ出ますけれども、実は沖縄は平均すると、全国と比較して必ずしも晴天率が高くない、そして温度が高い。太陽光パネルの場合は、最近技術が改善されてかなりよくなっていますが、温度が高いということは発電効率が、暑いところはあまり向

かない。そういう非常に難しい問題もあります。

また、もう1つは、住宅の専門部会でもぜひ議論してほしいんですけども、沖縄の場合は、結局車と、さっきお話にもありましたけれども、産業らしい大きな産業というのがそれほどないのは、みんな電力なんですね。それをどういう形で今後変えていくのかという点で非常に悩ましい問題で、かといって原発という議論は採算的にも規模的にも多分合わないだろうし。

そうなりますと風力、最近は可動式も出てきていますので、風力とか太陽光あるいは海水を使った何か新しい技術がないのか、このへんも含めて議論していかないとなかなか厳しい。

そこで県では、観光商工部でエネルギービジョンというのを去年から今年にかけて、エネルギー需要を見込んで、自然エネルギー系をどのぐらい増やしていくという議論はやっていますけれども、今そここのところでなかなか結果がまだ出ていない。今年度いっぱいかかると思うんですけど、今、県の動きとしてはそういう状況ですね。

○嘉数座長 どなたかほかに。はい、どうぞ。

○大澤委員 環境の話にちょっと戻りたいんですけども、この21世紀ビジョンを拝見すると、沖縄版グリーンニューディールとか、言葉は非常に立派だなという気がしていて、特に沖縄の環境というのは、先ほどの藤田先生がご指摘になられた経済価値なんかを見ても、さっきのハンドブックを見ると沖縄の観光収入というのは4,300億円とか4,200億円とかいうところで、この2,900億円というのが正しいのかどうかわかりませんが、非常にそういう意味ではまさに環境に支えられている産業と言っても過言ではないという意味で、環境というのは、もっと本当は強調されるべきだとは思いますが、先ほど池田先生のお話にもあったように、やはり自然に対する自然破壊というのは急速に進んでいると思いますし、昨今、政治問題化している東海岸の埋め立ての問題とか、決してこのグリーンニューディールという言葉と整合的な動きをしているかというところ、そうではないような気がしているんですね。

ちょっとざっくばらんな議論をしたいと思うので申し上げているんですが、こういうビジョンをつくるのが非常にいいと思うんですね。私なんかは沖縄に行ったときにはそういうことをやるべきだということを言ったんですけども、非常に網羅的なものをつくってもあまり意味がないだろう。しかもアクションと結びついていて、例えば環境なんていうのは当然外部性が非常に強い部分ですから、やはり公的なセクターがかなりの程度やら

ないとうまくいかないと思うんですね。だからさっき田中さんがやっていらっしゃるような活動を、例えば100倍の規模でやったときにどのくらい予算がかかって、それで沖縄のサンゴ礁というのが何年ぐらい先に再生されるかみたいな話、やるのであればそういう話をやらないと多分あまり意味がないだろうと。ビジョンというのは単に語っているだけでは全然意味がなくて、アクションに結びつかないと意味がないので、そういう意味で県として公的主体として、まさに外部性の高い環境、しかし環境が非常に経済と密接に関係がある。そういう中で環境にどのぐらいの資源をつぎ込むのかという議論を、先ほどの安田先生の話にもつながるんですけど、そういう数量的というかクオンティティタイプなものを出さないとなかなか議論が前に進みにくいのかなと。ですから、そういう議論をもっと深めるべきではないかという気がいたします。

○嘉数座長 大変貴重なご意見です。

お手元の資料4の6ページですか、ここを見て非常にびっくりするんですがCO₂の排出量の比較ですね。1990年比で沖縄は15.3%アップしているんですね。全国は14.0%。工場もないのにと話でしたが、これは多分に車とか家庭、電力関係主だと思っておりますが、車はいわゆるレンタカーが2万台も走っているということもありまして、これは2012年に終わる京都議定書で6%下がっておかなくちゃいけないんですよ。それが逆に全国で14%も上がっている。しかも90年比で2020年までに25%下げると。多分これはもう大変な努力を各地域でやらなくてはだめだと思うんですよ。ですからこの数値を少なくともチャレンジ25に合わせたような形をつくって、それに合わせて沖縄の資源をどういう形で活用するのかという計画をつくっていただきたいというふうに思っております。

○池田委員 藤田先生にもぜひお願いしたいのが、6ページにも書いてありますけれども、観光と環境をどうするか、開発と環境をどうするかという中で、いわゆるキャリング・キャパシティの話ですね。1,000万人の観光を目途というのがあって、それに対して環境収容能力はどうなっているのか。キャリング・キャパシティのほうをぜひ今の議論の延長の中で藤田先生なんかいろいろこのプラスとマイナスなんかを算出できるんじゃないかと思うんですね。そこをぜひ今後しっかり議論して出していただきたいというのが1点です。

それからもう1点は、今の議論の中で抜けているんですが、ゴミを含めた廃棄物のリサイクルの話、これは結構重要な話なので、これもやはり今後の議論の中でもぜひ入れてい

ただきたい。リサイクルはとても重要で、廃材のリサイクル、例えば今コンクリートは全部壊して、壊した廃材は再利用できるようになっているんですよ。ところが材料がうまく回ってこないというのがある。それからもう1つ大きいのは、離島の問題です。離島でいろんな材料、自動車もそうですが、それが出てきたらどうするかというので、これは輸送経費がかかるからということで大変難しい問題です。

もう1点は、いろんなゴミを燃やしたりなんかする最終処分場も、どこに最後のごみを捨てるか、埋めるかということも場所探しも含めて大きな問題になっていて、私がぜひ提唱したいのは、処分の施設能力をもっと上げれば、技術的に熔融化という形で最終的にはガラスのような溶けた物質に変わってくるんですね。これはものすごく高い熱が必要なので、今の設備をもっと向上させなければいけない。これをやればゴミは全部最終的にはまた道路舗装なり何なりに使えるんですね。だから最終処分場の必要がなくなります。ここは技術的にもできるので、こういったものをもっと国の支援も含めてやっていくべきじゃないかと思っています。

○嘉数座長 ありがとうございました。

この環境問題について何週間議論しても、し足りないという感じがしますが、時間もありませんので次に移りたいと思っております。

健康長寿についても、後ほどまた時間があればご議論していただきたいと思っております。

残った時間で、沖縄の伝統文化・音楽・スポーツ等・琉球舞踊等も含めまして、ご議論いただければと思っております。これは平田さんから口火を切ったほうがいいのかな。あなたのご専門ですので。

○平田委員 平田でございます。新しい方もいらっしゃいますので。

沖縄の地域にあります伝承・伝統芸能、そういったものを物語にして、そしてそれを地域の中学生・高校生に舞台を演じてもらって、子供たちがその舞台活動を通して感動体験をすることで、地域に根差して人に尽くせる仕事を考える。それから自分たちの地域を愛するということが実は自分自身を愛することにつながるんだというようなことで、教育で地域を興して、文化で産業を興すということで、今、TAOFactoryという社団法人の代表をやっております平田といいます。

僕のほうからは2つ、3つほどまとめてぽって言って短めに終わりたいと思います。

1つは、今僕自身が抱えている中で非常に感じているのは、文化で産業ということを標

榜している者の一人としてですが、本当は文化で産業を興すというのは非常に難しいこと
でございまして、なぜかという文化というのは僕の感覚でいけば、揺さぶるもので
あり、非常に人を歓喜させるものであるというのが根底にあります。

ですから、それを産業にしていくというのは、実は文化だけで産業にするとなるといわ
ゆる商業的な芸能世界であったりということになりかねないのですが、それは沖縄ではあ
まりそぐわないというのが僕の意見です。ですから、社会的な意味のある活動でありつ
つ、なおかつそれが感動産業という名のもとで、しっかり交流と情報発信の場として、そ
の中で人を育てるという、ハワイで言うところのいわゆるホスピタリティ、フラを子供の
ころから踊っていく中で、おばあちゃんに至るまでみんながフラショーを訪ねてくるとい
うか、そういうふうなもっと地域に根差した文化の産業という形がないかというのが今大
きな僕の宿題としてこの10年やっている活動でございまして。

その中で文化で産業を興す際に2つテーマがあって、1つは人的な整備と、2つ目に法
的な整備が必要だと思っています。新しいホールとかはいりません。地域にある死館(シカ
ン)と言われているホールが多々あります。稼働率が本当に低い、けれどもつくってしまった
というホールがあります。ただ、つくってしまったというものの、ハードとハートはど
っちも大事ですから、そのハードをどう生かすかというハートづくりが大事だという意味
で人的な整備という意味で、アートマネジメントができる人材が必要で、今残念ながら
芸大の中にもその科はコースとしてはちょこっとありそうですが、真剣にそれを考える人
がいない。ですから伝統芸能を演じるプレーヤーはいっぱい生まれます。しかし、その伝
統芸能を演じるプレーヤーを生かすアートマネジメントをする人がいないということに
よって、正直言って伝統芸能は伝統芸能の域から脱しきれないというのが現状だと思いま
す。

もう1つ法的な整備というのは、先ほどのホールを使うといった場合には、公的なホー
ルでございまして、地域住民へのサービスというのは大きくなります。それから、行政
についついありがちな公平にあまねく皆さんに対等にというようなことの中で、非常に特
化した活動というのが生まれてこない。特別扱いができないという名のもとに、非常に優
れた伝統芸能や新しい文化が生まれてこないという素地があるような気がします。

具体的に言うならば、地域のホールですと半年前、1年前に予約ができるわけですがけれ
ども、ところがこれをちゃんとした旅行会社とタッグを組んで見てもらおうと思った場合
には、旅行会社は2年、3年前からもう企画商品をつくるわけですね。そこに全くマッチ

してこないといった場合に、単なる条例を変えればいいだけの話ですが、そういうことさえもできないというような地域の現状があるのは確かです。ですから、文化特区ということをやってもいいんじゃないかという話もしたことがあります。文化特区する前に法的にみんなで話し合えば地域でできることは条例を変えればいいことじゃないのということで、その特区条例も却下されたことがあります。結局その地域、地方の文化行政の人たちが覚醒しない限り、今後の沖縄全体の文化覚醒もないのではないかというが、今大きな課題としてあります。ですから、人的な整備と法的な整備をぜひこの10年、20年後先の沖縄のためにもやるべきだというふうに思っています。

あと2つだけお話しさせてもらいます。例えば具体例としての提案をするならば、前回の専門委員会で海外に暮らす沖縄の人たち、ウチナーンチュの中における首里城の存在が非常にシンボルとなっているというお話をさせてもらいました。

その続きとしまして、沖縄の中でも、もっともっと連携を取った、もっと長めのコンセプトを持った沖縄の情報発信ということをやるとべきなんじゃないか。

1つは来年(2010年)は、世界遺産の10周年記念で登録の節目であります。さらに2011年には「世界のウチナーンチュ大会」というのが予定されているという中で、世界という名前が付くものが連続してあるわけですが、残念ながらその構想、プランが全くありません。なおかつ来年の10周年に関する予算も非常に脆弱なもので、10年間かけて文化的な資源である地域の文化財産であるといった感覚からもう一步踏み込んで、今度は交流の場として、情報発信の拠点として、もっとグスクをしっかりとやっていきたい。

そういう面で言うならば、世界遺産登録10周年を記念して、今予定しているのは、あくまで僕の思い付きですが、「世界の宝10周年記念大祝祭」ということで、世界の宝は地域の宝だと。グスクは僕らの遊び場だということ、地域ごとにグスクのイベントを催して、それを県でまとめて大きな流れにして、1年を通して10周年のイヤーをみんなでお祝いするという、アニバーサリーをお祝いするというような、ちゃんと世界にグスクここにありきというものを発信するべきではないか。

もう1つ同じようなことを言うならば、先ほどの環境の問題とも若干かぶってくるわけですが、やはり今1700年のころに玉城朝薫という人が踊奉行としてつくった組踊というのが重要無形文化財に国で指定されておりますけれども、実はそれ以来、沖縄では新しい文化というのはできていないというのが現実だと思います。その中でも今僕らはかかわる人として、ストーリー、踊り、空手は地域のオリジナルを使っていますけれども、もっ

ともっと突っ込んで、例えばサンゴの舞台セットを琉球ガラスを使って昼のサンゴの海のシーンと、それから夜のサンゴの海のシーンという、沖縄のものを使って海のシーンの舞台セットをつくるという考え方。琉球ガラスは台風にも強いですから、野外でも使えるということもあります。併せて衣装も沖縄の素材を使った布とか染め・織りを使ったような衣装をつくるとか、小道具も沖縄の伝統工芸を使ったクバガサ、エークというようなものを使う。楽曲、楽器も含めて、すべてそういったものが一つの作品として沖縄オリジナルの素材、環境にも優しい。それから新しいものではなく古いものを新しく使うという意味で、新たな文化の創出ということを図っていくということも今後大事なんじゃないかというふうにも思っております。

最後になりますけれども、そういった面で言うならば、アメリカの西海岸と東海岸の人たちの生き方を見ていますと、海岸沿いにいる人たちは、例えばサーフィンであったりダイビングであったりということを楽しまれる人たちというのは、比較的エコに関しては非常に関心が高いというデータがあると聞いています。それから都市部の人たちは、リサイクルとか環境問題に意識がいくのがなかなか難しいというように、もしかすると沖縄の人たちの生活意識の中に、こんなに自然があるんですけど、なかなかその機会がないものですから、もっと自然と触れ合うということがちゃんとあれば、自然とエコや環境に関する意識も向いてくるのではないかというふうにも思うと同時に、やはりそういった中で先ほどの平良統括監の説明と、内閣府の発表の時間があまりにも違うということも考えてみますと、僕ら沖縄側の人たちはどうやらちょっと自分たち沖縄のことをもっと自己分析が足りないのではないかなど。僕はこの21世紀ビジョンのメンバーの中の1人でもあります。改めてこうやってみてみると、本当に全部が入っている。どういうふうな方向になっても沖縄はいいんだという方向になっています。こうなると、本当の意味での沖縄のビジョンというのを沖縄の人たちは全く考えていないといわれても仕方がないなということもちょっと今日ドキッとしましたので、どうせ読むなら6-2ではなくて6-1を読んでもらえれば、今日はよかったかなと思います。そういった面で自分たち自身の自戒の念も込めながらですが、もっともっとウチナーンチュが自己分析をしていかなければいけないという反省を踏まえつつ、僕の意見とさせてもらいたいと思います。

○嘉数座長 大変貴重なご意見ありがとうございました。

今、3つほどご提案があったと思うんですが、1つはいわゆるプレーヤーはたくさんいますが、アートマネージャーとかプロデューサーというのがいない。平田さんのよう

な方がどんどん出てくれば、文化イノベーションもずいぶん出てくるんじゃないかと思っております。

もう1つは、文化特区、文化村というのには法的な整備が必要だということで、沖縄振興計画の中に位置づけされるべきだということでもあります。

もう1つは交流と発信ですね。これは従来やってきていることだと思うんですが、まだ何か協力者が足りないということだと思っております。

今、お話を聞いてびっくりしましたのは、玉城朝薫以来、新しい文化が沖縄に出ていないということですよ。これはミュージックも文化と数えると沖縄にあれほどタレントがたくさん出ており、D51とか私の知らない人もそこに書いてありますが、何か素材がありながら、おっしゃるように何か古いものを継続しながら斬新なものが出てくるような可能性はあるにもかかわらず、何か出てこないという印象を持つんですか。

○平田委員 全くそのとおりです。伝統芸能といわれているもので言うならば、伝統芸能というのは、今新しくつくっても、伝統芸能と言われなくてもいいかもしれませんが、少なくとも300年前、それから琉球舞踊の世界でもそうですが、はたしてそこに今対抗できるだけの生命力を持った芸能というものを、僕らは生み出しているのかなという面での意味でございます。ですから、音楽も島歌とか非常に幅が広いわけでございますけれども、これが例えば今歌われているいろんなアーティストの歌が50年後、100年後に本当に口ずさまれているのかとなると、地域に残る伝統行事や伝統芸能が、なぜ500年、600年という生命力を持ってここまで来たのかということ、本当はもっと分析しなくてはいけないのではないかなと。地域のコミュニティのよりどころとしてのものでもありますし、それからおそらく僕が直感的に思うに、きっと祈りがその根底にはあったような気がするんですね。今我々がつくっている新しい文化の中に本当にその祈りというものがあるのかということにもかかわってくるのかなという気がしております、そういった部分の沖縄の人が大事にしなくてはいけないものというものをもう1回確認したいという思いです。

○嘉数座長 どなたか。はい、どうぞ。

○安田委員 平田さんともこの間お話しをしたんですけど、沖縄の伝統というものとエンターテインメントあるいは東京における芸術というのとやはり根本的に違うわけですよ。もう1つ言わなければいけないことは、やはりさっきの自然の話も含めて、沖縄ではこれ以上観客が増えないんですよ。最大頑張っても1,000万プラス150万ということです。そうすると、そこに感動を呼ぶ、つまりたくさん人を集めてという芸術を頑張った

ところでも頭打ちになる。それと同時に沖縄の芸術は高い芸術であって、エンターテインメントではないということなんです。

そうすると何が起こるかという、やはり価値、単価を上げるしかないんだと思うんですよね。ですからそういう意味で言うと、例えば田中さんがおっしゃったように世界一きれいな海というのはやはり金を払って見るべき、単価が高くてもいいはずだと。そうすると、沖縄県が県の方針として、海に入るには俺たちはちゃんときれいになっているんだから、世界一を保っているんだからもっと払えという議論にしていく。

それから、かりゆしがありますよね。あれなんか僕も幾つか買いますが、結構きれいなものがあります。それだったら結構払ってもいいなと。僕は10万円のなんてあまり見たことはないんですけど、そのくらいまでちゃんとデザイン等きちっとしていたら、できるんじゃないか。例えば有名なデザイナーが入ってくるとかね。そういったことまで考えてもよろしいんじゃないか。

あるいは産物を売るときに、その容器がきれいであるとか、デザインをしていくとか、そういったちょっと付加価値をいかに上げるかということで、伝統芸能がうまく生きるようなそういう方針を多分県の文化部が考えなければいけないんじゃないか。そのためにどうお金を使うか。それで田中さんに頑張ってもらって、とにかく世界一きれいにするんだ。ずっと維持するんだということはお金をかけてやって、その分はお金をとっていいんじゃないかという気がするんですけど、そういう意味で観客がこれ以上増えないよという前提でもう一度やり方を考えなければいけないんじゃないかという気がするんですけど。

○嘉数座長 ありがとうございます。

ここで午前中の議論を終わりたいと思っております。午後は北野委員がお出でですので、科学技術と国際交流を含めましてご議論いただければと思っております。

1時スタートですね。

○小池参事官 1時からスタートということでございまして、恐縮ですがこの場でお弁当のほうを召し上がっていただく形になりますので、どうぞよろしく願いいたします。

では、1時スタートということでよろしく申し上げます。

○嘉数座長 できたらお食事しながら、私もちょっと文化についていろいろ議論したいところがありますので、平田さんここでお食事しながら議論しましょう。

【12:00～13:00 休憩】